探訪 99

ながわ

那珂川町郷土史研究会

裂田溝26　裂田神社周辺

裂田神社の横に町教育委員会が設置した「裂田溝」の説明板があります。

裂田溝と神功皇后の話は、奈良時代に完成した『日本書紀』の中に「儺河（那珂川）裂田溝」の記述があります。また、江戸時代（1709年）の福岡藩の儒学者・貝原益軒が編纂した『筑前国続風土記附録』には裂田溝の由来について次のように記されてます。

「安徳村の巽の方　龍神の城下御所原の東の崖下にあり。日本紀神功皇后紀に曰く、皇后神教の験ある事をしろしめして、更に神祇をいのりまつりて、みづから西をうち給はんとおぼしめし爰に神田を定て佃せらるる時に、儺河の水を引て神田につけんとおぼして溝をほらせらる。迹驚岡に及で大磐石ふさがりてことをすことを得ず。皇后竹内宿禰をめして、剣鏡を捧て神祇に祈りて溝を通す事を求む。則時に雷電霹靂して基盤を蹴裂て水を通ぜしむ。故に時の人其溝を號て裂田溝といふと日本紀に見えたり。轟岡のほとりの溝に大岩の上を水の通る所あり。是日本紀にしるせし雷のさきたる所なるべし。其所の両方小岩あり。一方は田の中に島のごとくにして其形亀に似たり。故に亀島といふ。又其流の下に岩ある所を掘切りたる所百間餘あり。そのほりたる大溝岸より水面まで所により五・六間、四・五間、水の深さ二尺五寸あるいは二尺程あり。溝の広さ下にて一間半あるいは二間あり。此溝を掘通したる所広く深くして且長く、人力のたやすくおよぶ所にあらず。是皆神功皇后の時ほらせ給へる溝なるべし。此溝の水は上なる山田村の一の堰手より来る。其亀島の側に地蔵堂あり。是神功皇后を祭れる社にして、地蔵と附合せしや、いぶかし」

この地蔵堂は、現在は裂田神社として社が建てられています。神社と相対し、溝をへだてた東側の田の中にあるのが亀島です。今は周囲を石垣で囲まれた1.3㎡ほどの平地となっていますが、発掘前の亀島は、雑木や、女竹が生い茂った小山でした。この中に大きなわらびが生えて、近くに住む人たちの春の楽しみの一つになっていました。また、神社の裏手に、溝に向かって屏風のような岩壁があります。地表の高さ2.5m、幅7.1mの大岩です。平成17年度に『水環境整備事業』の改修工事が始まり、発掘調査が行われました。岩壁の全面の土を掘り下げると、花崗岩を切り割ったような形の岩石が階段状に水底まで続いていました。この辺りから水路は大きく右へ曲り、神社の北側へと向きを変えます。水底の岩盤は亀島へと続き、水路ぎわに巨大な岩石が連なって発見されました。日本書紀や前に記述した『大岩が塞がり、溝を通すことが出来なかった。皇后は竹内宿禰を召して、神祇に祈らせたところ、雷が激しく鳴り、その岩を蹴り裂き、溝を通させた』とあるのは、この一帯です。

この貴重な歴史遺産である巨岩は、現在シートを貼り、その上にコンクリートが吹き付けられていますが、発掘された状態のままにしておくと、巨岩の劣化が進み風化してしまうのを防止するためだそうです。現況では、保存対策が万全でないため、今後の対処研究が待たれているところです。

神社裏の溝と平行してU字溝があります。この水は石碇堰から取水され、亀島の西側の端で安徳の「敷の向」の田んぼへ分水されます。U字溝は更に安徳台の南側の裾野を巡り山田側の田んぼへ続いています。

次号は裂田神社を紹介します。

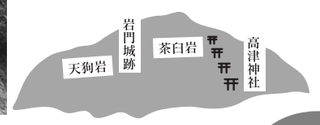
初春の裂田溝鴨の来て
羽を揺らして禊ぎの如く
文子

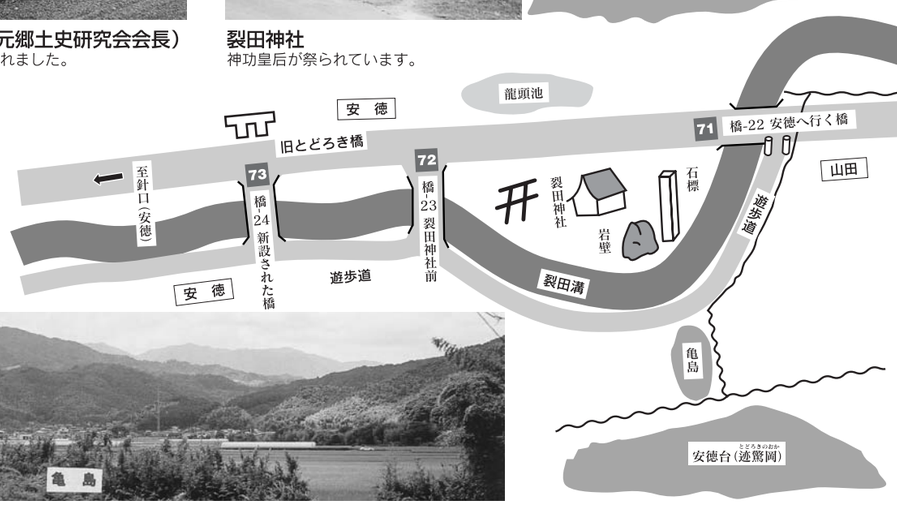
史跡メモ

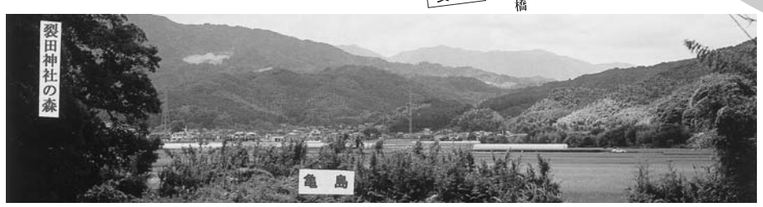
石標
岩壁
亀島
安徳台（迹驚岡）
裂田神社

亀島に立つ、故川崎幹二氏（元郷土史研究会会長）
裂田溝の工事完成を待ち望んでおられました。

裂田神社
神功皇后が祭られています。

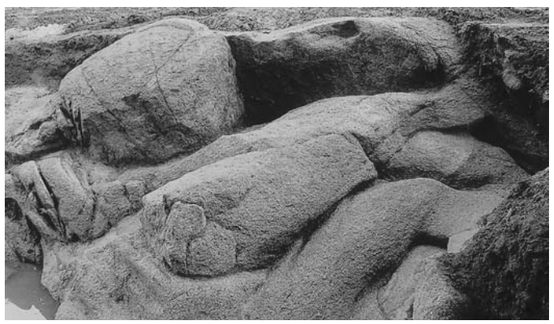




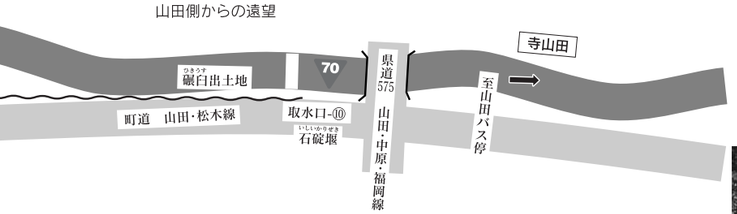


安徳側から山田方面を望む
前方は、「雷の裂きたる所の一方の岩、田の中に島のごとくにして其の形亀に似たり」の亀島です。発掘調査の結果、この島の下は花崗岩でできていました。

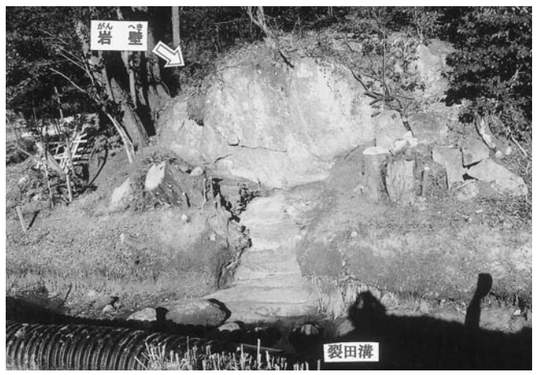
安徳台（迹驚岡）
山田側からの遠望



裂田溝の発掘調査で見つかった亀島側の巨岩



安徳区「裂田水路の整備を推進する会」役員の皆さん



岩壁　高さ2.5m　幅7.1m
発掘調査の結果、水底まで花崗岩の岩盤が続いていました。